

## チャット再考

石原 美奈子

エチオピアのムスリムの間でチャットは欠かせない。エチオピアにおけるムスリム人口は全人口の4割とも6割とも言われ、民族もオロモ、スルテ、ハラリ、アファール、ソマリ語を話すデゴディアやマレハンと多様であるが、チャットはアラビア語にも増して、エチオピアン・ムスリムの間で「共通言語」と化している。

エチオピアで「チャット」と呼ばれる *Catha edulis* (Forsskal) は、弱い覚醒作用のある植物で、中東アラブ諸国では「カート」、ケニアでは「ミラ」として知られ、東アフリカからイエメンにかけて幅広く栽培されている。中でもエチオピアでの利用は、文献上では初期のもので14世紀前半から確認されており、エチオピアはチャット原産地として最有力候補となっている。現在、エチオピアのチャットは中東諸国をはじめ欧米諸国にまで輸出されており、エチオピアの輸出品目の中では、コーヒー豆、羊皮に次いで第3位となっている。また、最近貨幣収入源として、チャットはコーヒー豆よりも利潤が高い事から、コーヒー栽培からチャット栽培に転換する農家が全国的に増えており、生産効率の点でチャットはコーヒーを追い抜き、追い越す傾向にあるといっても過言ではない。

このように経済的利潤の高い商品であるにもかかわらず、エチオピア国内においてチャットの利用には賛否両論があり、西洋的・欧米的価値の浸透が激しい都市部においては、「チャット・ドラッグ説」のためにチャットの「市民権」は次第に侵害されてきている。特に都市部において、チャットは高校生やいわゆる「ドウリエ（不良少年）」の類により小金で手持ち無沙汰な時を過ごす事のできる手段として利用されている為、主としてキリスト教徒、なかでもある程度西洋教育を受けてきた人々はチャットをドラッグ呼ばわりして一方的に非難する傾向があ

る。

しかしながら、チャット利用の拡大は、その経済的利潤の大きさおよび社会問題の文脈の中だけで説明するのではなく、人々がチャットに付する社会的・宗教的意義をも考察に入れる必要がある。頭ごなしに一方的非難を浴びせかけるより、人々がなぜ他でもなくチャットを選び好むのか、チャットがいかに関人の社会・宗教生活に組み込まれているのかを冷静に問いただしてみる事により、問題の所在が明らかになってくるといえないだろうか。

筆者がチャットに興味を抱いたのは、1992年9月から1995年3月まで、文部省国際学術研究「北東アフリカにおける民族の相克と生成に関する実証的研究（研究代表者：福井勝義京都大学教授）」の一環として、エチオピア南西部に長期の調査に入った時であった。当時、筆者の主たる研究対象は、エチオピア南西部に住むムスリム・オロモの宗教活動にあったが、調査の過程でチャット嗜みはインフォーマントのムスリムの人々と腹を割って議論する際に欠かせない行為であった。基本的に飲酒を禁ずるムスリム・オロモ社会においてチャットは、17世紀の英国のコーヒー・ハウスのコーヒー、中東諸国の喫茶店の水タバコ、日本の酒場の酒と同様な位置づけをもつ社交上の嗜みである。このことは、飲酒を全く苦手とする筆者にとって、実に好都合な条件であった事は言うまでもない。ムスリムの老人の中には、チャットを嗜み始めるまでは昔のことを思い出すどころか、外国人の筆者の話相手にすらなりたがらない人々もあり、インフォーマントを訪問する際には、必ず手土産にチャットを1「ゾルバ（束）」（10ブル前後、当時の換金レートで約150円）持参したものである。インフォーマントが村の宗教指導者や長老である場合、彼らは我々が持参したチャットを手に持ち「ドウアー（祈祷）」を挙

げてから、それを同席者全員に分けて一緒に噛んだ。そうすることにより、「ドゥアー」により引き寄せられた「バラカ（神の恩寵）」を共に享受する事ができると信じられている。逆に、「ドゥアー」を挙げたチャットを拒むことは、「ドゥアー」を挙げた者に対し不審を抱いている事を意味し、不敬に相当するとされた。このようにムスリム・オロモの間においてチャットは、「ドゥアー」を挙げ、「バラカ」を分配する為の象徴的媒体として利用される。したがって、エチオピア南西部のムスリム・オロモ社会において「ドゥアー」が宗教儀礼のみならず日常的な社交生活において欠かせないのと同様にチャットも必要不可欠であるといえる。

### 〔生産〕

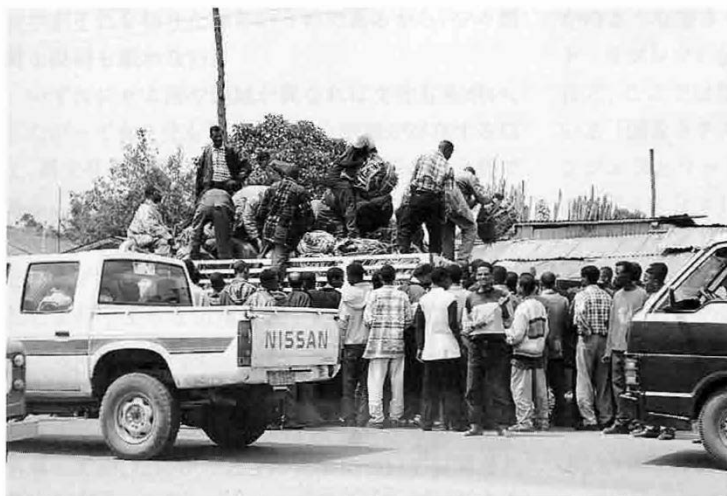
チャット産地として知られる地域は、同時にコーヒー産地として知られる。エチオピア東部はハラール及びディレダワ、南部はディツレ及びウォンド・ゲネット、西部はデンビドロ及びネツジョ、南西部はジンマ地方一帯からボンガ、ミザンタファリ、テビ等々。これらの町の周辺の農村には、コーヒー林の間を縫うようにしてチャット林が広がっている。チャットの栽培場所には地域差があり、ジンマ地方やデンビドロ周辺のように原生林あるいは植林園が視界を遮るような地域においては、通常チャットは住居から視界が届く近場に植えられる。しかしながら、ハラール周辺においては、どの農家も大規模なチャット農園を所有しており、自然林が少なく見通しがきくため、農家から多少離れたところの山の斜面に沿ってチャットの段々畑が広がって

いる。チャットは、適当な雨量があり、水はけがよく日のよく当たる場所に栽培される。チャットは雨季に生産量が最も多く、雨量の多い地域では1年に2、3回収穫する。また、中には灌漑により水を引き、1年中収穫できるように調節する地域もあるが、こうして出来たチャットは一般的に「弱く」「灌漑のチャット（イエマスノ・チャット）」と呼ばれ価値が低い。収穫は、男性がチャットの木に登り、新芽を含む先端の枝部を折り採る。折り採ったチャットは、乾燥を避けるためにエンセテの葉で包まれるか、あるいはビニール袋に入れられて最寄りの町の市で売られる。昔のハラールでは、チャットは乾燥を避けるために「ジラーブ」と呼ばれる牛皮の風呂敷のようなものが利用された。通常、背丈の高いチャットの先端の新芽部が最も高級とされ、そのような部位が含まれるチャットは「ナシフ」と呼ばれる。逆に、背丈の低いチャットは「ブッキサ（抜き取られた意）」と呼ばれ、価値も低い。

### 〔販売・流通〕

「チャット・テラ（チャットの市場）」は、通常の定期市とは離れた町の一角にかたまっている場合が多い。チャットは種類が豊富で、匂いの強弱、色、味により段階がつけられ、価格に反映される。また、栽培される村ごと、あるいはチャットの性格により名前がつけられる場合もある。例えば、ジンマ地方の「サッジャ（村名）」「フィンチョ（村名）」「クダ（村名）」「バダ・ブンナ（コーヒーの林を刈り払ってチャットを植えた意）」や、ディレダワ周辺の「アボ・ミスマル（全く針のように鋭い!）」等がそれ

である。チャットの販売にあたる人間の性別にも地域差があり、ジンマ地方ではかならず男性がチャットを売ることに対して、ディレダワやハラールでは女性が一般的である。さて、地方からアデイス・アベバへのチャットの持ち込みは、各検問所ごとに厳しく規制されており、個人用に持ち込む場合でもキロ当たり



アデイス・アベバ市内：シャシャマネ方面から輸送されてきたチャットの積み卸し

3ブルの税の支払いが義務づけられる。その為、アデイス・アベバ市内では地方と比べてチャットの価格は3、4倍にも跳ね上がる。

さて、全国からあらゆる産品が集結するアデイス・アベバにおいて、やはりチャットもまた全国の種類が集結する。アデイス・アベバへのチャットの輸送は、トラックやバス、あるいは飛行機で行われるが、チャットは鮮度が価格を左右するので、とくに輸出用チャットの輸送には飛行機が利用される。デルグ時代においてチャットの輸送・販売は「マハバル



アデイス市内：真夜中のチャット売り

（財団法人）」である「チャット輸送業者組合」が一手に握っており、チャットの輸出先もおおむねアラブ諸国に限られていた。現政権下では複数の「マハバル」がチャット販売を扱っており、そのうち、デルグ時代の「チャット輸送業者組合」から別れ出たオロモ系の「ディンショ」およびソマリ系の「ソジク」がもっとも有名で、輸出先も中東アラブ諸国に限らず欧米諸国にまで広がっている。現在、輸出用としてもっとも好まれる種類が、ディレダワやハラル周辺で栽培される「バデーッサ」という種類であり、また、アデイス・アベバで最も人気があるのは、やはりディレダワ周辺で栽培される「アウダイ」と呼ばれる種類である。

チャット研究は、国を挙げて栽培に力を入れているイエメンにおいてはある程度進んでいるものの、

おそらくチャット利用人口ではイエメンを凌ぐと思われるエチオピアにおいては、緒についたばかりである。筆者がチャット研究の必要性を説くのは、エチオピアにおいてチャットを奨励すべきであるといいたいからではない。むしろ、宗教的にも社会的にも、また経済的にもエチオピアの人々が大きな関心を抱いているチャットに対し、単にドラッグ問題として偏った観点から非難するのではなく、相応の関心が向けられてしかるべきであると思うからである。

(いしはら みなこ  
在エチオピア日本大使館専門調査員)